Osaka University Knowledge Archive

Title	<書評>河本敦夫著「現代造形の哲学」岩崎美術社, 1973年
Author(s)	金田, 民夫
Citation	デザイン理論. 1973, 12, p. 95-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53642
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

河本敦夫著
「現代造形の哲学」
岩崎美術社，1973年

本書は，京都工芸繊維大学を今春定年退官された著者の，長年にわたる現代美術とデザインの問題についての思索の跡をまとめたものである。本来，美術とデザインとは，その成立する場所，或ひはその空間的な気味を異にするものでありながら，しかも現代において両者が近接する理由を，哲学的に解明することが，本書の意図であるやうに思はれる。「現代造形」とは，勿論美術とデザインとを包括する概念であり，それの「哲学」的考察を試みる所以は，従来の美学的研究方法をもってしては，デザインの問題についての十全な解明に到達し得ないと考へたからであった。

ほぼ前半は現代美術の諸傾向，抽象主義，シュルレアリスム，キネティック・アートなどの諸様式の中に，それらを成立させる思想的根拠を探ねる。自然からの離脱と合理主義的自然観の否定を媒介として，「本質的な現実」（モンドリアン）へ迫らうとする方向が，そこに見出されるであらう。しかし，本質的な現実は生命的な現実の躍動を意味しなければならず，主観，客観の特殊的な性格から解放されて「普遍的（宇宙的）な美」を創造するものでなければならない。自然や現実の具象的な形態を超えた，いはば「純造形的空間」が，ここに形成されなければならない。それ故に美術活動は，日常的な現実の次元を越えて，むしろ現実の真相を開示するものでなければならず，この意味において，「道具的空間」の中に位置づけられるデザイン的造形とは，本来的に，その成立する場所を異にするものであった。しかし今世紀以来，美術は「実人生の場から脱離した別世界に生息するのではなく，実人生の空間そのものの中に出て，そこにあるもろもろの存在と共に足を地につけて在りたい」といふ願望を持つに至った。ここに美術思潮そのものの側から，現代のデザイン造形を促す方向が見出されるのである。

しかしデザイン活動における造形的空間は，美術におけるイメージの世界ではなく，現実的な道具的連関のうちに絡みあった，いはばわれわれの日常的な実践の場における空間である。即ち造形活動そのものにおいて，美術とデザインとは共通的な性格をもつとしても，造形的空間のもつ意味は相互に異ってゐる。とすれば，ここにデザイン的空間の造形的な統一性は如何にして可能であるかが問はれなければならない。

著者は，基礎科学者の取り扱ふ物理的空間と，工学的技術者にとっての道具的空間との相違について語る。基礎科学において見出された物理的空間の秩序を，工学的技術は実生活における道具的空間の中に組織付け，このことによって道具的空間をより一層秩序あるものとして発展させる。従って「工学的技術の空間は，歴史的道具的空間である」といはれる。即ち科学的に抽象された物理的乃至化学的空間を，実生活の場において，新しい秩序の道具的空間へと媒介し，これを歴史的に発展させるものが，工学的技術と呼ばれるものである。さうして今やデザイン活動は，構造上，このやうな工学的技術と極めて類似した性格をもつものとして捉へられるのである。「工学的技術が，基礎科学の抽象的空間と道具的空間とを媒介するのに対して，デザインは，先述の純造形的空間と道具的なそれとを媒介する」からである。媒介するとは，しかし美術を実生活における道具的な空間の中に，無媒介的に位置づけることではない。それはむしろ道具的な空間を「調和的に」秩序づける働きとして，デザイン活動の中に参加すべきものでなければならない。

かくしてデザインが，道具的空間における独自の造形活動を意味すべきであるならば，そこに働く美的，工学的，経済的等々の諸契機は，単に平面的な結合関係のうちに置かれるのではなく，むしろダイナミックな立体的統一関係のうちに働くものでなければならない。さうして，この意味においてのみ，デザインは，独自の統一的な造形活動として認められることができるのである。デザイン活動の統一の場は「多次元的」である。しかし次元を異にし，相互に異質的なものが，如何にして全体的統一を形成し得るのであらうか。それは「ながら」の関係の中に，様々な契機が，同質化されないままに共存し，物品の，全体のヴィジョンのうちにダイナミックな統一構造を形成しなければならない。かくして「デザインにおける物品の形態は，その物品本来の機能的な在り方，及びそれが開く生活軌道，ひいては広く生活空間を指示する記号体となっている」。

われわれは，現代において，いはば記号的環境の中に生きてゐる。さうして，実生活における形態を記号として見出すものが，われわれの機能的センスに外ならない。機械文明の中に培はれた機能的センスが，自己の生活領域の中に記号的意味を見出す時，それは理想的な生への記号として，必然的に抽象的形態への方向を内包しなければならない。機械的生産における造形が，その生産過程の類型性によって，自ら抽象的形態を産出すると同時に，またこのやうな抽象的造形を支へる精神的基盤として，われわれの生活空間の機能性と，機能美的なものへの志向が存在するといふことができるであらう。

本書は，現代において新しく注目されはじめたデザイン芸術が，どのやうな思想的基盤の上に成立するものであるか，またそれが現代の美術思潮と，どのやうな関はり合ひをもつかといふ点に論述の重点が置かれ，このやうな観点の下に現代美術の意味とデザイン芸

術の構造とを，より深い根底から解明することを意図してゐる様に思はれる。デザイン現象について述べられた書物は数多いが，デザイン的空間の構造を本質的に探究し，しかもデザインのもつ社会的，歴史的な機能への展望までを示唆する文献は，或ひは数少いのではないかと思ふ。勿論著者は本書を以てデザインに関する問題をすべて解決したわけではない。しかしデザインのもつ意味は，このやうな観点において，かなりな程度まで捉へられ得るであらう。ややもすれば，分裂した様々な角度からデザインの問題を捉へ，方法論的立場の明確でないデザイン研究にとって，確かに有益な指針を与へるものといふことができるであらう。

勿論，ここにも 2，3 の疑問がないわけではない。本書においては，現代における美術現象とデザイン現象との比較論的な考察も念頭に在ったと思はれ，その現象の背後に在る理念的な意味が問はれることによって，両者の近接的な関係が解明された。たしかに芸術思潮の面に関して，それは正当な解釈であらう。しかし反面，現代美術が純粋造形を目指し，抽象的なイメージの世界を建設することによって，逆に現実生活における芸術活動が要求されるに至るといふパラドクシカルな社会的欲求が在りはしないかといふ疑問も生じるのである。或ひはまた美術活動もデザイン活動も，人間の創造的な営みである以上，人間の精神的基盤において相連るものであることは，或ひは当然のことであるともいへるのである。現代的な美的センスの面において，或ひは歴史的，社会的な場におけるわれわれの芸術的体験のうちに，両者は本来的に密接な連関を含むものでなければならない。

デザインの構造的特質として語られた「ながら」の構造も，従来の芸術がその構造のうちに内包してゐたものではないであらうか。仏像を拝みながら視るとか，物語を理解しながら絵画作品を視るとか，いった態度は，人間が現実の複雑な諸契機の関聯のうちに生きる存在である以上，或ひは当然のことであったのかもしれない。むしろ「ながら」の構造をもつ芸術活動が，芸術の自律性の確立への方向のうちに，純粋造形とは別種のジャンルとして，実生活におけるデザイン活動を成立させるに至ったと考へることもできるのである。しかしこのやうな考察態度にとって，デザイン造形が，美学的探究の範囲を越えるとするならば，従来の芸術活動についても，美学は無力であったといふ，矛盾した帰決が導き出されることになりはしないだらうか。

ここに想起されるのは，「技術美の美学」を提唱される竹内敏雄氏の立場である（「塔と橋」参照)。自然美と芸術美との接点として，また両者を媒介するものとして，技術美の独自性を主張する彼は，勿論現代デザインの造形性を念頭に置きながら，現代美学の課題の中心に技術美の問題を打ち立てやうとする。勿論彼の著書がデザインの本質的契機を端的に捉へてゐるとはいへないであらう。ただデザインの問題についての美学的なアプロー

チの方法が，少くともそこに示されてゐるのではないかと思ふ。勿論技術美は現代の機能主義的デザインの様式においてのみ認められるのではなく，もっと広くわれわれの生活の地盤における道具的空間のうちに成立するものであるが故に，むしろより本質的な問題として，芸術活動が本来的に人間的技術の次元の下に還元されることによって見出されるものでなければならない。現代のデザインにおいては，現代的な美的センスが，新しい様式を産出するであらう。デザイン活動が，技術を通して人間の生活をより豊かに，より理想的な状態に導くべきものであるならば，美もまたわれわれの生活にとって有意味的 significant なものでなければならない。美の本質的追求は，われわれの現実的な生の地盤の上にこそ位置づけられるべきであるともいはなければならず，そこには技術美のみならず，社会美や文化美といった美的範疇すら語られるべきであらう。美は窮極的に，生活の中に根ざした「人間的」な美である外はないからである。

同志社大学　金田民夫